後　記

小林良彰先生は二〇二〇年三月末日をもって定年退職される。博士課程の単位取得満期退学直後の一九八二年四月に専任講師として採用されて以来、三八年の長きにわたって塾の法学部で過ごされた訳である。この退職記念号は小林先生を慕う研究仲間や同僚、ならびに小林先生の指導を受けた弟子達によって寄稿された論文で構成されている。私は弟弟子として四〇年近い付き合いがあるが、よもや私がこの編集後記を書くことになるとは想像もしていなかった。小林先生に追いつけ追い越せと思いながらその距離は一向に縮まることはなく、逆にますます離されていった。小林先生は永遠に超えることのできない壁のような存在であった。

小林先生との思い出は多々あるが、その人となりについて記しておきたい。かつてある政治家がそのように評されたように、小林先生はまさに「コンピュータ付きブルドーザー」であったと思う。豊富な知識と情報に基づいた論理的な判断とその判断に基づく素早く迷いのない対応にはいつも驚かされたものである。

小林先生の研究者としての輝かしい業績を今ここで並べたてる必要はないだろう。選挙をはじめとした日本政治の実証的研究において、つねに日本の政治学界を牽引するトップランナーの一人であったことに間違いはない。小林先生の学界に対する貢献はそれだけではない。日本政治学会、日本選挙学会、さらには公共選択学会といった日本の政治学における主要学会で理事長を務められ、学会のさらなる発展に尽力された。若手研究者に研究発表の場を開いただけではなく、財政の健全化にも尽力された。小林先生が理事長として手がけられた様々な改革は今でも継承されている。

研究者としてだけではなく教育者としての小林先生の功績も見逃すことはできない。小林先生に指導を受けた多くの院生が大学に職を得て研究者として活躍しているだけではない。そのゼミの卒業生には世界的に著名な民間企業だけではなく、法曹の世界に進んだ者も官僚の世界に進んだ者も多数いる。小林先生の人となりとその研究者としての力量に憧れて集まった優れた学生の集団が小林ゼミであった。

最後に小林先生の意外な側面について触れておきたい。知る人ぞ知るラグビーの愛好家としての小林先生である。

単に観るのが好きというのではなく、若い頃から選手として実際に様々な場でプレーをされてきた。現在の体型を見るとプロップかなと思わざるを得ないのであるが、若い頃には細身の快速ウイングであったそうだ。残念ながら膝の故障のため体育会でのプレーは断念されたそうであるが、このことは日本の政治学界には幸いであった。長年親しまれてきたラグビーで培われた忍耐力と集中力とがブルドーザーの原動力であったに違いない。退職の年にラグビーのワールドカップが日本で開催されたのも、ストイックに研究に従事された小林先生に対する天からのご褒美であったのだろう。

小林先生は塾を退職された後も、さらなる高みを目指してご自身の研究に邁進されるだけではなく、政府の審議会等の委員など様々な仕事で多忙な日々を過ごされるに違いない。健康に留意されて今後もますますご活躍されることをお祈りする次第である。

二〇一九年一二月

法学部教授　河野武司